

〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL http://edventure.jp/

学校文化における排除と包摂

Ed.ベンチャーの学校支援事業では、様々な教育課題をより深く考えるための学習会を行っている。「理論学習会」「授業研究会」「スタディツア」「ママ・パパのための学習会」「外国につながる子ども理解のための学習会」「特別支援教育のための学習会」である。これらの事業をみるにつけ、教育に関わる基礎基本が多くあることをあらためて感じる。

さて、今回の Ed.ベンだよりでは、6月5日に開催された「特別支援教育のための学習会」の講師、二羽（ふたば）泰子先生（東京大学大学院教育学研究科 特任助教）のお話をきっかけとして、浮かび上がった課題を整理してみたい。

まずはじめに確認しておかなければならないことが二つある。一つ目は、「特別支援教育」の枠での講演であったが、「特別支援教育」の枠を大きく超えた、「インクルーシブな学校づくり」へ向かう話であったことである。インクルーシブな学校づくりは、インクルーシブな社会づくりとほぼ同義であり、障がいのある者と障がいのない者が、どのような関係性を築いていけるのかという話にはなっても、いわゆる健常者から障がい者に提供する「特別支援教育」が、話題の正面に据えられることはなかった。逆に、「特別支援教育」と呼ばれるものの「功罪」が随所で述べられることとなった。

二つ目は、インクルーシブな学校づくりが、単なる理想として語られるのではなく、深い葛藤を背景にして、それでも選択するべき道として提起されたことである。講師の二羽先生は全盲という障がいとともに生きてきた。全盲というハンディによって出会ってきた様々な経験によれば、たとえば先ほどの「特別支援」によって守られてきた世界と、それ故に失った世界とを、常に葛藤として抱え、選択を迫られてきたという。障がいのない者が「インクルーシブ」を語る時、美しいストーリーを持つ理想として聞き心地のよいことばになることが多いが、ひとたび、障がいというハンディを背負った存在から我々に語られるとき、それは当事者からのごまかしのきかない要求として、私たちに突きつけられることになる。こうして、インクルーシブな世界は、障がい者にとっても、健常者にとっても、共通の「葛藤の場」として設定されることになる。

それでは、二羽先生のお話に沿って、具体的にいくつかの課題を整理してみる。

学校における「排除」 今回二羽先生が選ばれた講演のテーマは「学校文化における包摂と排除」。障がいの問題を「障がいのある個人が背負わなければならない問題なのか」という先生自身の疑問を背景に、テーマが設定されたことが想像できる。よって、障がいのある個人からの視点ではなく、学校という「社会」からの「障がい」への「態度」が問われることとなり、排除の実相を見極めることから話が始まることになっていた。

●学校文化における排除は、意図的でないことから、排除していることに気がつかないことさえある。学校の主流となる文化そのものが排他的なのだ。ルールの遵守・行事の尊重・授業中の態度・学校での振る舞いなどの基準から逸脱する子どもは、排除されることになる。

●差異があることによって被っている不平等を解消するために、差異を強調して支援を提供しても、ネガティブなラベル（スティグマ）が貼られることによって、不平等はより強化される。しかし、差異を無視して同じように扱おうとすれば、元々の不平等は温存されてしまい、どちらにせよ、ジレンマを抱えることとなる。これを「差異のジレンマ」という。

学力か、つながりか、という選択は必要なのか こうした「排除」の元に、障がいのある子どもは、常に二者択一を迫られてきた。「学力」をとるのか、「つながり」をとるのかということは、障がい者というラベルを受け入れて、特別支援教育の下で支援を受けるか、それともがんばって適応して、支援を受けないかという具体的な選択を迫られることである。まして、学力を選ぶ時、本当に今の特別支援教育がベストなのかという問いも常に残る。障がいのある者にとって、学力もつながりも両方手に入れられる道はないのだろうか、と二羽先生は問いかける。



障がい児はどこで学ぶのが適切なのか？

この当たり前とも言うべき問題を、障がいのない私たちは、あまりにも「ないがしろにしてきた」ということに、話を聞いていて、今更ながら気がついた。障がいのある子どもたちにとって、特別な支援を受けるのか、それとも適応を頑張りながら大きな集団で生きるのか、という選択は、選択の可能性が保証されることで、より望ましい方向にあると、心のどこかで思っていたのである。そもそも、なぜそんな選択を迫られなければならないのか、その選択は可能性ではなく、当事者たちを追い込むことになるのだ、ということに気がつかないできた鈍感な自分たちがそこにはいる。

二羽先生が幼稚園時代からの経験を語る中で浮き彫りになったのは、特別支援学校でぶつかってきたのは、①友達がいない学習の限界と、②他人に迷惑をかけてはいけないんだという自己規制の壁。相克する思いの中で、やはり居場所が見つからないつらさ。「一緒」であることへの障がい者としての不安……。しかしその一方では、障がい者はともに学べないのか？ともに生きられないのか？という疑問……。安心できる「孤独」がいいのか、「孤独」に居場所を探し続け、集団にしがみつくなのがいいのかという、先生が抱えてきた解けない疑問。そしてそれらは、「障がいの問題は、障がいのある個人が背負わなければならない問題なのか」という問いに対する答えと同様、当事者に背負わされるものではなく、より当事者以外の者たちが結論を見いださなくてはならない問題なのだ。

障がい者養護施設「やまゆり園」の事件からまもなく2年。加害者へのバッシングは大きかったものの、障がい者に対するまなざしはそれ以後変わってきたのだろうか。5月28日に起きた通学バスを待つ児童への殺傷事件は、なぜ「ひきこもり」への偏見を助長する契機となり、新たな息子殺人まで引き起こさなければならなかったのだろうか。

自己責任論が当たり前として勝者と敗者を分ける今の時代、障がいの問題を「障がいのある個人が背負わなければならない問題なのか」と改めて提起することは受け入れ難いムードに満ちているのかもしれない。しかし、こうした包摂に向かう問いにこそ、私たちが求める社会のあるべき姿が見えてくるように思うのだ。格差と分断が広がる今だからこそ、二羽先生から寄せられた問いかけは生きてくるはずである。

大阪府の「ともに学ぶ」教育が教えてくれたこと

先生は最後に大阪で出会った「居場所のある学校」について語ってくれた。先生曰く、「私は目が見えないけど、その学校の空気を感じます。居場所のある学校は、空気が動いているんです。決してじっとしていないんです。」そして、その学校の一人の先生の次の言葉を衝撃的にうけとめたという。「この子どもたちがおってくれてほんまに良かった」。こうした学校を増やすことが、私自身が生きることなのだと、最後におっしゃられたのが印象的だった。

夏から秋のEd.ベンチャー学習会

◆スタディツア

7月29日(月) スタディツア事前学習会@@大和市文化創造拠点シリウス

8月9日(金) 子ども自立生活支援センター「きらり」(神奈川県平塚市)訪問

◆特別支援教育のための学習会 スタディツア

8月7日(水)9:45~12:00 社会福祉法人大和しらかし会「第一松風園」訪問

◆外国人の子ども理解のための学習会 @大和市文化創造拠点シリウス

8月21日(水)・22日(木) テーマ:「人権」の観点から考える外国人の子ども理解

◆授業研究会 @大和市文化創造拠点シリウス

8月27日(火)19:00~21:00「算数・数学」の実践報告 講師:加藤綾氏(中学校教諭)

9月17日(火)19:00~21:00 実践報告・授業案検討

◆ママ・パパのための学習会 @大和市文化創造拠点シリウス

9月8日(日)10:00~12:00「学級づくりの基本~教室での教師と子どもの関係~」【4月理論学習会再演】

◆理論学習会 @大和市文化創造拠点シリウス

9月2日(月)19:00~21:00「性の多様性を考える」文献講読会

10月7日(月)19:00~21:00 講師:日本弁護士連合会「奨学金問題から見える子どもたちの学びの現状」

詳しくはホームページをご覧ください!!

お知らせ

Ed.ベンチャーも構成団体となっている「県央地区教育懇談会実行委員会」主催で、講演会が行われます。

『知ろう!語り合おう! 外国籍の子どもたち -くらし、学習、そして就労-』

2019年8月20日(火) 18:20~20:15 海老名市文化会館 351多目的室

問い合わせ先: 県中央地域連合 電話 0467-76-4067 FAX0467-76-4068

【理事の一言】3.11から8年が経過したとふと思うことがある。未だにおよそ2500人の方々が行方不明のままである。まだふるさとに戻れないのかと思う。また、福島県で起きた原発事故は、未だに収束していない。政府の発表では、2050年頃に収束すると計画されているようだ。私の周りでは、原発の話になると「まだそんな話をしている?」「もう安全なんじゃない?」などという言葉が返ってくる。もしくは、無視・話題を変えられる。。毎日のように電気に頼り生活をしているが、原発・原発作業員・原発周辺で生活を送っていた方々のことは、どこかで『人ごと』になってきてしまっているのではないかと考える。日頃の忙しさの中でも、忘れずしなければならぬと思う。それにしても、後30年か。。(MT)